

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02828

研究課題名（和文）英語の語強勢の有標性が英語母語話者と英語学習者の発話と知覚におよぼす影響

研究課題名（英文）The influence of the markedness on native English speakers' and English learners' production and perception of English lexical stress

研究代表者

菅原 真理子 (Mariko, Sugahara)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：10411050

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、英語の単語内で第1強勢に隣接する有標な条件下の完全母音の英語母語話者による発話および韻律的強さ評価の研究、日本人英語学習者と韓国人英語学習者による英単語の強勢位置判断に関する研究を行った。この成果は論文3本、学会発表3件であり、完全母音が「弱い」と評価されていると裏付ける結果は得られなかったが、発話研究の結果からは、弛緩母音に関しては完全母音のフォルマント特性から逸脱するほどに弱化している可能性が示唆された。この成果は論文2本と学会発表4件であり、母語に語アクセントシステムがあると、母語の無標な語アクセントパターンに引きずられながら英語の強勢位置判断を行うことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語は語強勢言語であり、語強勢の有無と母音の質との間に密接な関係がある。原則、強音節は完全母音を核とするのに対し、それに隣接する音節は弱音節であり母音の質も弱化する。しかし中にはその環境においても弱化せずほぼ完全母音と同じ音質を保つ母音も存在する。そのような母音の正体を明らかにすることが本課題の研究の目的であったが、こので得られた結果は日本における英語母音の発音教育に直接生かせる知見であると考えられる。研究では、日本人英語学習者が英単語のどこに語強勢を付与する傾向が高いかを解明することを試みたが、この研究で得られた知見は日本人英語学習者への英語語強勢の指導に直接生かせる知見である。

研究成果の概要（英文）：In this research project, (i) and (ii) were conducted: (i) a study of native English speakers' production and prosodic prominence ratings of English full vowels in a marked environment which is adjacent to the primary-stress syllables within the same words, and (ii) a study of English lexical stress location judgments by Japanese and Korean learners of English. As for (i), although no results were obtained to support the full vowels in the marked environment being rated as 'weak', the results of the production experiment suggested a possibility that lax full vowels in that environment may be reduced to the extent that their formant properties were deviated from the properties of full vowels in other environments. The study of (ii) suggests that when the learners' native language has a lexical accent system, they make their English stress location judgments based on the unmarked lexical accent pattern of their native language.

研究分野：英語と日本語の韻律

キーワード：英語の語強勢 英語学習者による英単語への強勢付与 英語の第1強勢に隣接する非弱化母音 英語音節の韻律的強さの評価 英語母音のフォルマント特性

## 1. 研究開始当初の背景

代表者のこれまでの研究(基盤研究(C)、課題名「英語学習者の母語の韻律特性が英語の強勢パターンの知覚判断に及ぼす影響」、および若手研究(B)、課題名「英語の語強勢の音響特性の知覚:日本語母語英語学習者と英語母語話者の比較」)において、ピッチで語強勢(第1強勢)の位置が判断できないように合成された英単語の音声刺激を聞き手に提示し、聞き手が語強勢位置を判断するという知覚実験を、英語母語話者、日本語を母語とする英語学習者(以降「J英語学習者」とする)、韓国語ソウル方言を母語とする英語学習者(以降「KS学習者」とする)を対象に行った。その結果、聞き手は母語の音韻体系で最も無標な語強勢もしくは語アクセントのパターンに偏向した判断を下すということが明らかになった。しかし、これらの研究で得られた知見はすべて知覚に基づくものであり、有標な語強勢パターンを持つ語を発話するときにも、母語でより無標なパターンに引きずられた形で発音されるのかはまだ明らかにされていない。またこれらの先行研究の知覚実験で使用された語彙は、どれもその音節数・形態構造・品詞・語種などに関して限られたタイプのものばかりであり、より多くの種類の語彙で検証をしていく必要もある。さらにこれらの研究は、英語において無標な「強勢の衝突を回避するリズムパターン」から逸脱するような有標なパターンを持つ語、すなわち強勢の衝突を持つ英語の単語の発音や知覚に関しては触れなかった。これを受け、本研究課題では「有標な語強勢パターンを持つ英単語の発話と知覚」を大きなテーマとした。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、以下の(1)と(2)の解明を本課題の目的とした。

### (1) 強勢の衝突:英語母語話者の発話と知覚

英語は「強勢の衝突」(強勢音節同士が隣り合う状態)を避ける言語である。それがゆえに2音節語で語末に第1強勢がある単純語の多くは、*Brazil* [bræ.zɪl]、*morass* [mə.ræs]のように、語頭音節は弱化母音[ə]を伴って無強勢となるのが無標なパターンである。しかし同じように語末に第1強勢がある2音節の単純語であっても、*Bahrain* [ba.rém]、*motel* [moʊ.tél]のように、語頭音節に完全母音が現れるケースもある。完全母音には強勢が備わっているという立場からすると、この語頭音節の完全母音は第2強勢となり、その直後に第1強勢が続いているということになる。そのように考えると、これらの語は強勢の衝突を禁止する制約に違反する有標な語となる。これらの有標な語を英語母語話者はどのように発音・知覚しているのか。例えば1つの単語内で完全母音が2つ並ぶ有標な環境(完全母音+第1強勢完全母音、もしくは第1強勢完全母音+完全母音)で、英語母語話者による第1強勢に隣接する完全母音の発話の音響特性はどうなっているのか。また、その第1強勢に隣接する完全母音の韻律的強さを英語母語話者はどのように認識しているのか。このような疑問点を解明することを目的のひとつとした。

### (2) 強勢位置判断:英語と典型的に異なる言語を母語とする英語学習者の発話と知覚

英語の第1強勢の位置としてどの音節が無標であるかは、頻度から見た場合と制約から見た場合とでは異なる。英語の語彙の約70%が語頭に第1強勢があるという頻度の観点からすると、語頭が最も無標な第1強勢の位置となり、4音節語や5音節語などの長い語においては、語中音節は有標な位置となる。しかし英語において最もデフォルトな強勢規則(ラテン語アクセント規則:後ろから2つ目音節が重ければそこに、それが軽ければ後ろから3つ目音節に第1強勢)の観点からみると、4~5音節語などの長い語においては、語中音節が無標な第1強勢位置となり、語頭音節は有標な位置となる。いったいどちらの観点からの有標な位置を、英語母語話者および英語学習者は、知覚や発話の際に避けようとするのか。4音節語を用いた代表者の過去の知覚実験研究においては、英語母語話者とSK英語学習者は第1強勢の位置判断が語頭音節に偏向するのに対し、J英語学習者にはそのような偏向はなく、語中に第1強勢があるという判断が高まった。これは英語母語話者とSK英語学習者は頻度に基づく英語の語強勢の有標性に敏感であり、J英語学習者はラテン語アクセント規則に基づく有標性に敏感であると解釈される。J英語学習者の場合、母語の外来語アクセント体系においてラテン語アクセント規則もしくはそれに近似した規則(後ろから3つ目のモーラを含む音節にアクセントを付与する規則)が働いており、その規則からみて無標なパターンを好むためであると考えられる。このように代表者の過去の研究において、英語母語話者や典型的に異なる言語を母語とする英語学習者の強勢位置判断に関して、ある程度ことはわかってきたが、過去の研究は知覚実験のみに偏っており、たとえばJ英語学習者が4音節語を発話する際にも語中音節に第1強勢を置く確率が高まるのか、といった発話に関しては何も明らかになっていなかった。

これを受け、4音節語の強勢位置判断に関して、母語において英語名詞の語強勢規則(ラテン語強勢規則)に近い語アクセント規則が存在し、かつ語アクセントが弁別的に機能するJ英語学

習者と、語アクセントが存在しないSK英語学習者との間に、強勢位置判断に違いがあるのか、そして違いがあるのであれば、それは母語の影響なのか、といった疑問点を解明することをもうひとつの目的とした。

### 3. 研究の方法

上記の(1)と(2)に関して、発話実験とアンケート調査を実施した。(1)に関しては同志社大学に短期語学留学をしていたアメリカ英語母語話者(KCJSとAKPの留学生)、(2)に関してはJ英語学習者(全員、同志社大学在籍者)と、同志社大学および近隣の大学に留学生として在籍していたSK英語学習者であった。

当初は会話における自然発話コーパスとラジオニュース音読コーパスに収録されている発話音声の分析も計画に掲げていたが、対象とする単語のデータを十分な個数得られる確証がなかったため、実施しなかった。また、英語母語話者、J英語学習者、SK英語学習者の3グループに対しての知覚実験およびも予定していたが、研究途中でコロナの感染が拡大し、大学構内への立ち入りが禁止され、留学生が日本に入国できない時期があったため、知覚実験は断念せざるを得なかった。

### 4. 研究成果

以下に、上記の(1)と(2)のそれぞれの研究成果を提示する。

#### <(1)に関する研究成果>

(1)に関しては、論文[1]、[2]、[3]および学会発表[A]、[B]、[C]が挙げられる。[1]と[2]および[A]は、英語母語話者が第1強勢母音と隣り合う完全母音を、どの程度の韻律的強さを持つと認識しているのかを探った研究であり、[3]および[B]と[C]は、第1強勢母音と隣り合う完全母音の音響特性に関する研究である。

[1]と[2]の研究では、音声刺激は用いずに、紙面上にスペル表記と音節区分けの表記で示された単語をアメリカ英語母語話者に提示し、彼らにそれぞれの音節の強さを5段階で評価してもらった。[1]では、語頭において、4種類の母音を核とする音節(第1強勢母音の例 *audiences*, 第2強勢母音の例 *auditoria*, 第1強勢直前の完全母音の例 *audition*, 無強勢弱化母音の例 *addition*)の強さの評価を比較した。そこから明らかになったのは、以下の通りである。

- ・ 第1強勢母音音節はその他のどの母音を核とする音節よりも統計的に有意に強いと評価されていた。
- ・ 第2強勢母音音節は弱化母音音節より有意に強いと評価されていた。
- ・ 第2強勢母音音節と第1強勢直前の完全母音音節、および第1強勢直前の完全母音音節と弱化母音音節の間には、統計的に有意な差はなかったが、傾向としては以下の通りであった：第2強勢母音 > 第1強勢直前の完全母音 > 弱化母音。

[2]では、語頭に第1強勢がある2音節語の語末において、完全母音音節(例 *Argos*)と弱化母音音節(例 *Argus*)の強さ評価を比較した。その結果、完全母音の方が統計的に有意に弱化母音より強いと評価されていた。さらにこの語末音節の結果を[1]の語頭音節の結果と比較したところ、第1強勢に隣接する完全母音音節の場合、語頭と語末のどちらも強さ評価中央値が「3」であったのに対し、同じく第1強勢に隣接する弱化母音音節の場合は語頭の中央値は「3」、そして語末の中央値は「2」となっていた。以上の結果から、語末では第1強勢に隣接する完全母音と弱化母音の強さ評価に差が出るが、語頭では差があまり顕著でないということが分かった。さらにこのことは、たとえ弱化母音であっても語頭にあるというだけで、ある程度強いと認識されることを示しており、語頭の韻律的優位性を示唆している。

第1強勢に隣接する語末位置において、明らかに完全母音音節(例 *Argos*)の方が弱化母音音節(例 *Argus*)よりも強いと評価されていたことを受け、前者には何らかの強勢が備わっているという立場をとる Selkirk (1980)や Liberman & Prince (1977)の考え方が支持されると、[2]では結論付けた。

この[1]と[2]の調査では、被験者であるアメリカ英語母語話者に音声刺激は与えずに、あくまで紙面に提示された単語のスペル表記と音節区分け表記に対して強さを評価したため、彼らが何に依拠して強さ評価を決めたのかが明らかになっていない。この点に関して、今後さらに研究を進める必要がある。

[3]および[B]と[C]の研究では、語頭の第1強勢母音(例 *audiences*)、第2強勢母音(例 *auditoria*)、第1強勢直前の完全母音(例 *audition*)、無強勢弱化母音の(例 *addition*)の音響的側面について考察した。この研究では、先行研究の Fear et al. (1995)にならい、第1強勢母音を P (primarily stressed vowel)、第2強勢母音を S (secondarily stressed vowel)、第1強勢直前の完全母音と U (unstressed unreduced vowel)、弱化母音を R (reduced vowel)と呼んでいる。(第1強勢に隣接する完全母音は強勢を伴っているという Selkirk (1980)や Liberman & Prince (1977)からすると、第1

強勢直前の完全母音は stressed となるべきであるが、ここは先行研究に従い、unstressed の頭文字をとって U とした。)既に Fear et al. (1995)により、U は P/S よりも短く、さらに母音の質 ( $F2-F1$  で示され、 $F2-F1$  が大きければ大きいほど弱化している)も P/S より弱化気味であるのに対し、R よりは長く、さらに R ほどには弱化していないということが分かっている(継続時間  $P>S>U>R$ 、 $F2-F1$   $P,S<U<R$ )。

ひとつの極端な考え方として、U が P や S よりも弱化気味であるのは、その継続時間が短く、その短い継続時間ゆえに target undershoot が起こり、その target undershoot の結果として多少弱化気味になる、というものが挙げられる。この考え方からすると、U が弱化気味になるのはあくまでその継続時間の短さの副産物に過ぎない。[3]の研究ではこの考え方を検証するために、2種類の完全母音 (/æ/と/o:~ɑ:/)の P、S、U それぞれが語頭に来る単語と、対応する弱化母音で始まる単語をアメリカ英語母語話者に音読してもらい、語頭母音の継続時間と  $F2-F1$  を計測し、線形混合モデル (Linear Mixed Model、LMM) を用いた統計分析を行った。

LMM の分析を実行するために SPSS を用いた。目標変数として母音の「 $F2-F1$ 」の値を設定し、固定変数として「母音タイプ (P、S、U、R)」、 $F2-F1$ 、継続時間、母音タイプ×継続時間を、そしてランダム変数として「参加者」と「単語セット」を設定した。その結果、全母音タイプの継続時間の平均値を与えられたときであっても、U の  $F2-F1$  の期待値は P/S より大きく、かつ R より小さいという結果となった。すなわち、継続時間の影響を排除しても、U の弱化の度合いは P/S より大きく R より小さいという結果となった。これは、U の弱化の度合いは単なる継続時間の短さの副産物ではないということを示唆している。

さらにこの[3]の研究で明らかになったのは、/æ/の方が/o:~ɑ:/よりも、U の弱化の度合いが大きいという点である。/o:~ɑ:/に関しては、U の  $F2-F1$  のデータポイントは R のそれからは大きく乖離しており、P と S のデータポイントとの重複が際立っていたが(すなわち P/S/U をひとつのグループとして R をもうひとつのグループとするような分布になっていたが)、/æ/に関しては、U のデータポイントは、R と P/S の中間的な位置に分布していた。使用した母音の種類が 2 種類と少なすぎるため、これだけでは強い提言はできないが、/æ/が弛緩母音であり/o:~ɑ:/が緊張母音であることに、前者と後者の違いが起因している可能性がある。弛緩母音が緊張母音と比較して韻律的に弱い位置で弱化しやすいということは既に Chomsky & Halle (1968)によって指摘されている。第 1 強勢直前の完全母音という有標な条件が与えられた場合にも、弛緩母音には弱化の度合いが大きくなり、強勢母音 P/S と同じ完全母音の域からは逸脱することで、有標な構造を回避しようとする力が大きく働くが、緊張母音はそのような有標な条件下でもその完全母音性をぶれずに維持し、P/S と同じ完全母音としてとどまっている可能性がある。

以上を受け、[1]と[2]の強さ評価に基づく結果からは、第 1 強勢に隣接する有標な条件下で、完全母音が「弱い」と評価されていると裏付ける結果は得られなかったが、[3]の発話研究の結果からは、その有標な条件下で、弛緩母音に関しては完全母音のフォルマント特性から逸脱するほどに弱化している可能性が示唆されており、より多くのデータで検証していく必要がある。さらなる今後の課題として、U 母音の音声刺激を英語母語話者たちが耳で聴いた際に、どのような強さの母音であると認識するのかも、知覚実験を行うことで検証していく必要がある。

## <(2)に関する研究成果>

(2)に関する研究成果は論文[4]と[5]および学会発表[D]~[G]である。これらの研究では、J 英語学習者、SK 英語学習者および英語母語話者(E)が紙面上で英単語のスペル表記を提示され、その単語のどこに第 1 強勢があるか判断し、強勢記号を付与するタスクに臨んだ。

[4]では、共通の動詞語幹を共有する現在分詞形-ing と派生名詞形-ion の単語のどこに第 1 強勢を置くかに関して、J、SK、そして E の 3 言語話者の間で違いがあることが明らかになった。E の場合は接尾辞にかかわらず正答率が高く、現在分詞形-ing では第 1 音節(語頭)に、派生名詞形-ion では第 3 音節(語幹末)にストレス符号を付与するケースが高率を示した。J の場合は接尾辞に関係なく、一貫して語幹末である第 3 音節への符号付与が高率を示していた。それに対して同じく L2 として英語を学んでいる SK の場合は、J ほどの極端な第 3 音節への偏向は現在分詞形においても派生名詞形においても観察されなかった。また SK は接辞の違いに関係なく、低率ではあれど第 2 と第 4 音節へストレス符号を付与するケースも見受けられ、それは J や E の場合よりも統計的に有意に多かった。

Jが一貫して語幹末である第3音節への強勢記号付与を高率で示していたことに関しては、4つの仮説が成り立つ。仮説1は、日本語の外来語のアクセントパターンが転移しているというもの、仮説2は、日本語母語話者は音節の重さに敏感すぎて、英語の語末音節が長母音を含む場合はそこに強勢を置くという原則を過剰一般化し、強勢転移を正しく学習できていないという考え方、仮説3は日本語と英語の両言語で影響力をもつLAR(ラテン語アクセント規則)の過剰適用であるという考え方、そして仮説4は、日本語において、動詞語幹に屈折接辞や派生接辞を付与した際に、循環的にアクセント位置が移動することから、それと同じことが英語でも起こっていると

勘違いしているという仮説である。また、仮説1と仮説2はともに、語幹だけから成り立つ不定詞形の*dominate*を与えられた際にも、現在分詞形の*dominating*を与えられた際にも、どちらのケースでもJは語幹末第1強勢を好むという予測が成り立つが、仮説3と仮説4の場合はともに、不定詞形(次の[5]の段落では「基本形」と呼ぶ)を与えられたときには語頭第1強勢を、現在分詞形が与えられたときには語幹末第1強勢を好むことが予測される。この予測のどちらが正しいかに関しては、次に示す[5]の結果から、仮説3と4の方が正しい予測をしていることがわかる。

[5]では、J英語学習者とSK英語学習者が、英語の接辞を伴わずに語根からのみ成る基本形(例：*educate, parent*)、屈折形(例：*educating*)、派生語(例：*education, parental*)に語強勢を付与する際に、母語の韻律体系がどう影響するかを調べた。基本形については、どちらの言語グループも語頭の正しいストレス(例：*éducate, párent*)を好むことが最も多かったが、ものによってはJの方がSKより良い結果を示した。接尾が付与された形については、JはSKよりも、接尾が「強勢中立」(例：*-ing*)か「強勢移動」(例：*-al*)かにかかわらず、形態素境界付近への強制移動をより多く好んだ。韓国語ソウル方言が語強勢・語アクセントを持たないのに対し、日本語は語アクセントを持つ言語であり、それが故に英語の語強勢にもより敏感であり、基本形のタスクでJの方がSKよりも、ものによっては高い正答率を上げた理由の一つとして考えられる。さらに、日本語のアクセントは形態素の境界付近に位置する傾向があり(例：*kyóoto* vs. *kyootó-si*, 東京方言の*tábe* (infinitive) vs. *tabé-reba* (conditional), 京阪方言の*áge* (inf) vs. *agé-reba* (cond))、これがJが接尾辞を伴う英単語を与えられた際に強制移動を偏重的に好む理由であると考えられる。

これらの[4]と[5]の研究から得られた知見で重要な点としては、母語に語アクセントシステムがあると、その母語の無標な語アクセントパターンに引きずられながら、L2である英語の語強勢位置判断を行うという点である。日本語は語アクセント言語であり、かつアクセントが形態素の境界に位置する傾向が高く、その母語知識を英語の語強勢位置判断にも使う傾向にあると考えられる。

当初の研究計画では、このJ英語学習者とSK英語学習者および英語母語話者による英単語の強勢付与に関して、発話研究の結果も成果として報告することとなり、本課題の研究期間に発話実験を行い音声データも収集したが、現在そのデータは解析中である。今後の研究成果として発表していく予定である。

## 論文

- [1] Sugahara, Mariko. (2021). "The Prominence Degree of Word-Initial Pretonic Syllables with Full Vowels in English: An Introspective Rating Study." In Reiko Okabe, Jun Yashima, Yusuke Kubota & Tatsuya Isono (eds.) *The Joy and Enjoyment of Linguistic Research: A Festschrift for Takane Ito* (『言語研究の楽しさと楽しみ: 伊藤たかね先生退職記念論文集』). Kaitakusha: Tokyo. (pp. 441-450).
- [2] 菅原真理子 (2023). 「英語における主強勢直後の語末完全母音音節の韻律的強さの評価—聴覚刺激を用いない内省判断タスクに基づく研究」『同志社大学英語英文学研究』104号, pp. 137-159.
- [3] Sugahara, Mariko. (2023). "Formant characteristics of unstressed unreduced vowels in American English: Only explained by duration?" *Proceedings of International Congress of Phonetic Sciences 2023*.
- [4] 菅原真理子 (2019). 「英語の第1強勢の位置判断に及ぼす母語の影響—現在分詞形/動名詞形-*ing*と派生名詞形-*ion*への強制付与のアンケート調査から—」『同志社大学英語英文学研究』100合併号, pp. 165-221.
- [5] Sugahara, Mariko. (2020). "Lexical Stress Assignment to Base, Inflected and Derived Words in English by Japanese and Seoul Korean Learners of English." In Nobuaki Minematsu, Mariko Kondo, Takayuki Arai and Ryoko Hayashi (eds.) *Proceedings of the 10th International Conference on Speech Prosody 2020*. pp. 905-909, DOI: 10.21437/SpeechProsody.2020-185, ISSN: 2333-2042.

## 学会発表

- [A] Sugahara, Mariko. (2019). "The prominence levels of full vowels in English: A questionnaire study." 音韻論フェスタ14 於明海大学
- [B] 菅原真理子 (2021). 「英語完全母音のプロミネンスレベルと音響特性: 予備的結果報告」国立国語研究所 対照言語学プロジェクト プロソディー研究班 オンライン研究会
- [C] Sugahara, Mariko. (2023). "Formant characteristics of unstressed unreduced vowels in American English: Only explained by duration?" *International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) 2023*. Plague, Czech Republic.
- [D] Sugahara, Mariko. (2018). "Lexical stress assignment in English trisyllabic verbs ending with *-ate* and *-ute* by Japanese and Seoul Korean speakers." *ICPP 2018*. NINJAL, Japan.
- [E] Sugahara, Mariko. (2020). "Lexical Stress Assignment to Base, Inflected and Derived Words in English by Japanese and Seoul Korean Learners of English." *10th International Conference on Speech Prosody 2020*, The University of Tokyo, Japan.
- [F] Sugahara, Mariko. (2020). "Assignment of English Lexical Stress by Japanese and Seoul Korean Learners of English." *The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference Satellite Workshop: Experimental Phonetics and Phonology*, Seoul, Republic of Korea.
- [G] 菅原真理子 (2021). 「日本語母語話者と韓国語ソウル方言母語話者による英語ストレス付与」*Prosody & Grammar Festa 5* 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」・神戸大学人文学研究科(共催)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Mariko Sugahara	4. 巻 -
2. 論文標題 Formant characteristics of unstressed unreduced vowels in American English: Only explained by duration?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of ICPhS 2023	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原 真理子	4. 巻 104
2. 論文標題 英語における主強勢直後の語末完全母音音節の韻律的強さの評価：聴覚刺激を用いない内省判断タスクに基づく研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同志社大学英語英文学研究 = Doshisha studies in English	6. 最初と最後の頁 137 ~ 159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00029644	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mariko Sugahara	4. 巻 -
2. 論文標題 Lexical Stress Assignment to Base, Inflected and Derived Words in English by Japanese and Seoul Korean Learners of English	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 10th International Conference on Speech Prosody 2020	6. 最初と最後の頁 905 ~ 909
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21437/SpeechProsody.2020-185	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原 真理子	4. 巻 100
2. 論文標題 英語の第1強勢の位置判断に及ぼす母語の影響：現在分詞形/動名詞形-ingと派生名詞形-ionへの強勢付与のアンケート調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社大学英語英文学研究 = Doshisha studies in English	6. 最初と最後の頁 165 ~ 221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2018.0000000417	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Mariko Sugahara
2. 発表標題 Formant characteristics of unstressed unreduced vowels in American English: Only explained by duration?
3. 学会等名 ICPhS 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菅原真理子
2. 発表標題 日本語母語話者と韓国語ソウル方言母語話者による英語ストレス付与
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 5 国立国語研究所共同研究プロジェクト・神戸大学人文学研究科（共催）「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原真理子
2. 発表標題 英語完全母音のプロミネンスレベルと音響特性：予備的結果報告
3. 学会等名 国立国語研究所 対照言語学プロジェクト プロソディー研究班 オンライン研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mariko Sugahara
2. 発表標題 Lexical Stress Assignment to Base, Inflected and Derived Words in English by Japanese and Seoul Korean Learners of English
3. 学会等名 10th International Conference on Speech Prosody 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mariko Sugahara
2. 発表標題 Assignment of English Lexical Stress by Japanese and Seoul Korean Learners of English
3. 学会等名 The 28th Japanese/Korean Linguistics Conference Satellite Workshop: Experimental Phonetics and Phonology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sugahara, Mariko
2. 発表標題 The prominence levels of full vowels in English: A questionnaire study
3. 学会等名 Phonology Festa 14
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sugahara, Mariko
2. 発表標題 Lexical stress assignment in English trisyllabic verbs ending with -ate and -ute by Japanese and Seoul Korean speakers
3. 学会等名 NINJAL ICPP 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岡部玲子・矢島純・窪田悠介・磯野達也(編)、論文寄稿者その他多数(Sugahara, Mariko含む)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 536
3. 書名 『言語研究の楽しさと楽しみ』(Sugaharaによる論文 "The Prominence Degree of Word-Initial Pretonic Syllables with Full Vowels in English: An Introspective Rating Study," pp. 441-450.)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------